

# 現代アイルランド劇作家研究(4): ウィルソン・ジョン・ヘア

河野賢司

## (I) 著者略歴と著作一覧

ウィルソン・ジョン・ヘア (Wilson John Haire, 1932-) は1932年4月6日、北アイルランドのベルファースト生れ。プロテスタントの父、カトリックの母のもと、〈鉄槌〉(‘The Hammer’) と呼ばれるプロテスタントのスラム地区で育ち、14歳で市内の造船所で働き始め、大工見習いも経験する。1954年、22歳のときにロンドンに出て建設業に従事するかたわら、ユニティ劇場 (Unity Theatre) で役者や裏方として余暇を過ごし、1960年代の終りから70年代にかけて多くの戯曲を発表し、1972年にジョージ・デヴァイン賞 (George Devine Award)、73年には『イヴニング・スタンダード』紙の最優秀新人賞 (the *Evening Standard's* Most Promising Playwright Award) を受賞し、1974年にロイヤル・コート劇場の座付作家 (Resident Dramatist) に着任している。以下の作品リストが示すように、舞台劇7作品とテレビ・ドラマ2作品がある<sup>1)</sup>。

舞台劇作品	邦 訳	初演劇場	初演年
<i>The Clockin' Hen</i>	『卵を抱く雌鶏』	Hampstead Theatre, London	1968
<i>The Diamond, Bone and Hammer and Along the Sloughs of Ulster</i>	『ダイヤモンドと骨とハンマーとアルスターの泥道沿い』	Hampstead Theatre, London	1968/9
<i>Within Two Shadows</i>	『二つの影のなかで』	Royal Court, London	1972
<i>Bloom of the Diamond Stone</i>	『ダイヤモンド石の輝き』	Abbey Theatre, Dublin	1973/9
<i>Echoes from a Concrete Canyon</i>	『コンクリート峡谷からのこだま』	Royal Court, London	1975
<i>Lost Worlds: Newsflash, Wedding Breakfast, Roost</i>	『失われた世界—ニュース速報, 結婚披露会, ねぐら』	Cottesloe Theatre at the National Theatre, London	1978
<i>Worlds Apart*</i>	『かけ離れて』	(unknown)	1981
テレビ・ドラマ			
<i>Letter from a Soldier</i>	『ある兵士からの手紙』 (舞台公演)	BBC TV the Orange Tree, Richmond	1975 1978
<i>The Dandelion Clock</i>	『タンポポの綿毛ぼうず』	BBC TV	1975

\* J.P.Dylanとの共作

このリストで見ると、ヘアの劇作家としての活躍は1981年の共作を最後に、残念なことに20年も空白のようである。来春に70歳を迎える彼の近況もわからない。悪く言えば、70年代にだけ活躍した過去の作家ということにもなるだろうが、その存在だけは知っていた彼の代表作と思われる2つの舞台劇 *Within Two Shadows* と *Bloom of the Diamond Stone* のテキストを運よく入手できたので、これらの内容を詳しく紹介し、彼の演劇の特徴について考察する基礎資料を提供してみたい。

## (II) 作品梗概と論評

### (1) *Within Two Shadows* 『二つの影のなかで』（2幕全7場）

北アイルランドではカトリックとプロテスタントの婚姻は‘mixed marriage’という用語で表現される。この作品の主題は、宗派を異にする夫婦が陥った悲劇的な家庭生活である。ただし注意すべきなのは、上述のヘアの自伝事実とは正反対に、カトリックの父親とプロテスタントの母親の不和を軸に、年子の5人の子どもたち（1男4女）がそれぞれ父と母の陣営を支持して、家庭内の亀裂が顕在化したマグリーヴィ家の姿を描いていることである。登場人物はリリー（40代初めで小太り）、シューイ（瘦身長軀）、長男サミー（19歳、瘦身長軀）、長女メアリー（18歳、小柄・黒髪）、二女マーサ（17歳、金髪）、三女コレット（16歳、瘦身黒髪）、四女アン（15歳、快活）。2幕でも長女が23歳、四女アンが20歳で、娘たちはみな20代はじめである。「1969年以降」とされる第2幕は第1幕の5年後の設定になっているから、漠然と「1960年代はじめ」と記されている第1幕は具体的には1964年と特定してもよいだろう。象徴的な標題の由来は、リリーの次の台詞である。——「以前は、私にはひとつの家族があると思っていただけで、いまではそれは、二つに切られた一匹のミミズだということが分かったわ。ミミズは両方を再生して…誰が切ったのかなんて尋ねたりしないで…自分で拵えた二つの影法師を誇りに思って這いまわり…我が身のためにだけ生きて…誰が（影法師のよとの）光を生んでいるのか訊きもしない。」（78）

第1幕。夜明け前、ベルファースト近郊の労働者階級居住区アボッツ・クロウス（Abbotts Close）のマグリーヴィ（McGreevy）家の食堂。家族写真や宗教画などは一切飾られていない。板付きのリリー（Lily）がしゃがんで暖炉の火をおこす。遅れて現れた夫シューイ（Shooie）は昨夜の肉料理のせいで気分が悪いと言う。ライオンの腸は3mだが、人間の腸は9mだから排泄競争では分が悪い、草食の象は巨漢だがきつと消化器官が立派なんだ、と呑気に講釈を垂れる。7時きっかりにいつもテーマ音楽

(signatute tune) のように箒で天井をつついてやらねば、二階で寝ている子どもたちは自発的に起き出さない。1歳半までいっかな歩く気配がなく心配させた長男サミー (Sammy) を筆頭に、リリーは5人の名前を大声で呼ぶ。まずマーサ (Martha) 登場。彼女も気分がすぐれない。続いて入ってきたサミーは気弱なマーサの物真似をしてからかう。続くコレット (Colette) も、父親の言葉尻をとらえて批判し、逆に父親からたしなめられ、食堂から離れる。からかいをやめないサミーに、14歳のときに規律の厳しい軍隊に放り込めばよかった、と父親。入り口でためらっていたメアリー (Mary) に、眼の手術をせずに藪睨みのままにしとけばよかった、と母親はひどい暴言を吐く。最後に元気良く挨拶をして入ってきたアン (Anne) を皆は無視し、アンは泣き出す。リリーはアンを慰めるが、全員起こし終わったことをすっかり忘れて天井を箒でつつく。壊れたら誰が修繕するんだ、という夫の言葉にリリーは、二階の戸棚の蝶番は1年も前から外れたままだ、修繕なら自分がしてみせる、と箒でつつき、台所へ去る。頭の良くない女だな、というシューイの悪口に、戻ってきたコレットが、だったら精神科の名医に連れて行けば、と口答え。シューイは彼女の顔を平手打ちする。サミーがそれをなじるとシューイは彼の肩を殴りつける。台所から戻ったリリーは、父親には口答えしないように命じるが、発端が自分への悪口と知って夫を睨みつけ、シューイは出て行く。気分が悪いとマーサも席を立ち、メアリーも出かける準備を口実に出て行く。マーサの病弱さは夫の血筋であり、夫のせいで自分は落ちぶれてしまった、とリリーは嘆く。彼女の父親はティローン州の有力地方新聞『アルスター衛兵』の経営者兼編集者であり、北アイルランド中部のクックスタウンの半分の土地を所有し、パン耳を落とした上品な三角サンド、〈ミルク・イン・ファースト〉の喫茶習慣が日常で、「乳液分泌の」(‘lactiferous’) <sup>ラクティフェラス</sup>なんて難しい語彙も使っていた。ところがいまでは、ドッグ・レースへ急ぐ港湾労働者と汚いおむつの生活で、すっかりプロレタリア化されてしまった、と。そこへ、ショパンを演奏するピアノ曲が流れ、リリーと他の3人の子どもは下手な演奏だと馬鹿にする。父親側の味方と思いきメアリーが降りてきて、サミーと口論後、シューイがマーサを連れて降りてくる。自分は11歳のころ、薪の行商でバイオリンのレッスン費用を稼ぎ、酔っ払いの父親に見つからぬように裏庭の敷石道に隠したものだ、という十八番 <sup>おはこ</sup>の話<sup>を</sup>聞かせる。そこへ隣人のエミリー・バー (Emily Barr) がミルク差しを後ろ手に訪ねてくる。この第三者の存在も憚らず、辛辣な当て擦りの応酬は続き、マーサは気分が悪いとまた出ていく。エミリーがミルクをせしめて退散した後も口論は治まらない。マーサは胆汁を吐いたと訴える。リンネル工場の汽笛が鳴り、ようやくそれぞれの仕事に出勤する(1場)。

サミーが作業服で帰宅。父親シューイを出し抜いて先に帰り、父の定席に座る。ド

アに掛け金を掛けたというのでリリーは開けに立つ。サミーは席を譲ろうとせず、リリーから平手打ちを浴びる。リリーが台所へ行った間に、シューイはリリーの兄弟の悪口を言い、かつて自分がダンガリー・ズボン姿でモーツァルトやチャイコフスキーのバイオリン曲を演奏したときの相手の啞然とした様子や、手を荒らさぬように造船所でも手袋をはめていたこと、サミーの頭の形は好きだが、残念ながら鼻が母親似だ、またバイオリンを教えてやってもいいが、などと語る。リリーが配膳した食事を二人は黙々と食べる。(マーサは食事もとらず寝転がってばかり。)シューイは食卓を離れ、やがて静かなピアノ曲が流れてくる。リリーはそんな高尚な音楽は富裕階級にこそお似合いでこの家には不釣合だと非難する。帰宅したメアリーはリリーと口論になり、彼女はマーサを誘ってディスコ店へ出かけようとする。降りてきたシューイとリリーは、つかみかからんばかりのやりとりになり、彼は出て行く。夫の険悪な凝視に怯えたリリーは〈未亡人の武器〉火掻き棒を暖炉に入れて万一に備える。ピアノ曲が流れてくる。ちょうど帰宅したアンに、発狂寸前のシューイから殺されそうになったところだ、とリリーは大袈裟に言い立て、不気味に感じた彼女は皆が外出したと思わせるために部屋の明かりを消させる。ピアノが止み、家の外の舗道に足音がして、正面ドアをノックする音。シューイの囁き声がして部屋のドアが開き照明がつけられると、彼の姿。実はコレットが鍵を忘れて入れずにいただけだったが、トラックで乗りつけ、太鼓や笛を持ったオレンジ団の連中が通りの奥にたむろしていると伝える。3人の娘は聖書の祈禱の文句を唱えるが、サミーだけは嬉しそうに揉み手をしているのを夫婦は訝しく見つめる(2場)。

太鼓の音が遠くで響き、マグリーヴィ家の外の通りには木製アーチが立てられている。五角形の星、オレンジ色の百合、英国国旗、アルスター地方旗、ボイン川を白馬に跨がって越えようとするウィリアム3世の絵などの装飾が施され、〈1690年を忘れるな〉〈ローマ法王は無用〉〈降伏拒否〉といった政治スローガンが大書されている。一家は暗闇のなかでじっとしており、プロテスタントの愛唱歌「父が着けし肩章」の歌声が聞こえ、やがて彼らの行進と共に過ぎていく。リリーは明かりをつけ、7月12日の記念日だからやむを得ない、と諦めるが、シューイは全くの嫌がらせだ、と不機嫌。ディスコ店の顔馴染みだった若者の顔つきがこの日は異様に変わっていた、言うコレットに、アンがその男には悪い噂があると耳打ちすると、サミーは盗み聞きの実似をしてからかう。シューイはいっそ赤旗でも屋根に掲げようか、自分はアイルランド共和国旗やその愛国者の絵を掲揚する気にはならない、掲げるなら赤旗とウルフ・トーンやヘンリー・マクラッケン(Henry Joy McCracken, 1767-98)の落書きであり、奇妙なことに彼らはプロテスタントなのだ、と語る。それに対してサミーは、白旗が

いちばん中立だが、両派の臆病者の旗であり、味方からも敵からも憎まれるだろう、二つの憎しみは一つの正義を生まねばならないが、二つの正義は憎しみを引き起こす、と言う。かつて、井戸に毒が盛られたのか、カエルが浮いていたことがあり、それ以来加減が悪いのだとマーサ。蟄居して退屈げなコレットとアンにリリーは外出を許す。サミーは、新教徒の子どもたちとの揉め事を恐れる父親のせいで、いつも鉄条網の背後の生活だったので、宗派的アイデンティティを喪失しており、だからこそ自分は紛争を望むようになったのだ、と苦悩の根源を打ち明けるが、軍隊に放り込んで規律を教えなかったのが間違いだった、とシューイは取り合わず、サミーは出て行く。マーサとメアリーは子どものころの「押し倒し鬼ごっこ」や「くすぐりの罰」、温室ガラスに突っ込んで頭髪がぼっさり切れた危ない話などを懐かしく思い出す。窓外を見やったシューイはアーチ辺りにガード（警官？）がいるのに気づく。戸外の連中への意思表示のために、（耳障りだけれど）ピアノを弾いてほしい、と意外な要望をリリーは夫にする。シューイとマーサは出て行き、やがてピアノ演奏が始まる。残されたリリーは結婚生活の惨めさを嘆き、メアリーはこんな剣呑な家庭には恋人を呼べやしない、と応酬するうちにピアノが止み、シューイが鉛パイプを手に、マーサと駆け込んでくる。笛の音が聞こえ、オレンジ団員たちの行進が戻ってきたのだ。照明が消され、リリーは火掻き棒をつかむ。外出していたコレットとアンがクスクス笑いしながら戻ってくる。サミーも歌を歌いながら戻る。ドアにノックがあり、訪ねてきたのはまた例のエミリーだった。カトリックを罵るオレンジ団員たちに敢然と抵抗した店の親父の話をして去る。戸外では篝火が焚かれ、カトリックへの罵声が浴びせられている。サミーは腹話術風に「法王糞食らえ」と呟き、声の出所を知って両親は激怒する。とりわけシューイは、自然の素晴らしさを息子サミーに真摯に語って聞かせたはずなのに、と嘆き、チャイコフスキー演奏中に忍び笑いしたものだからバイオリンの弓を8歳の彼の頭でへし折ったこともあったという。リリーは、通りの暴徒たちと自分は同根であり、木は根を軽蔑できない、と自分の出自を弁護する。酔っ払った暴徒たちの歌声が近づき、サミーは突然外へ飛び出す。正面ドアに石が投げられ、リリーはドアを開け、暴徒に向かって挑発的な野次を繰り返し叫ぶので、娘たちは気が気でない。暴徒とリリーの過激な罵声合戦はしばらく続き、サミーが裏口から戻ってくる。エミリーがリリーを連れて戻り、お陰で巻き添えを食って窓ガラスに投石を受ける被害にあったと苦情。サミーは皆から非難され、ついには父親の胸を殴りつける。アンは明朝乗るバスには暴徒たちが大勢いる、と怯える（3場）。

**第2幕。**第1幕と同じ場所の5年後。テレビとラジオが新たに増え、純白の結婚式の写真が飾られている。戸外から〈銃撃ごっこ〉の子どもの声。板付きは暖炉のそば

にシューイ。すぐ現れたりリーの言葉から、労働運動に荷担したために数千人の従業員のなかの解雇者50人に含まれたらしく、いまや無職。病状が悪化したらしいマーサを夫婦二人で介護して連れてきて肘掛け椅子に座らせる。黒雲が迫り、共食いするブヨが襲ってくる悪夢に彼女はうなされ、毎朝眩暈を覚えるという。サミーは渡英したまま、ずっと音沙汰がない。石炭を暖炉にくべるしか能のない夫に八つ当たりしてりリーは退室。残されたシューイはまどろむマーサに問わず語りの話。結婚したコレットが今週末、実家に夫と来るのだが、プロテスタントのこの男にピアノを触られるのが耐えられないらしい。戻ってきたりリーと入れ替わりにシューイは階上へ上がり、やがてショパンのピアノ曲が流れる。妹夫妻を接待するための買出しに出たメアリーが帰宅し、病状を悲観するマーサをなだめる。シューイが降りてきて、またマーサに世間話——かつてのペン・パル女性と町で邂逅したこと、手紙を焼いて邪魔をしたその兄も昨年他界した——を聞かせる。メアリーはお茶をいれて母親を呼び、自分は教会の奉仕活動に出かけていく。この献身的活動を快く思わないシューイに、二千年前のキリストの磔刑後、打ち込まれた釘を抜こうとする者と磨こうとする者とに分かれた、とりリーはなじる（1場）。

夕食の支度は整っている。ノックの音にシューイは身支度を口実に階上へ逃げ、りリーが応対する。招待した娘夫婦（夫のビリー [Billy] は長身で黒髪）の他に、末娘のアンも姿を見せたのは嬉しい驚き。娘夫婦はいちゃいちゃと仲睦まじそうに振る舞い、ここへ来る途中に材木とタイヤで拵えた篝火を18も見かけた、と語る。メアリーが登場するが、妹夫婦と素っ気ないやりとりを交わし、なんども場をはずす。コレットはとりなすように夫を庭へ案内する。メアリーは仕事や家事はきちんとなすが意固地な性格になった、とアンにこぼすりリー。彼女はマーサの介護の責務もあって、ほとんどうちにばかりいる。やがて戻ってきたコレットたちの口から、アンが婚約間近であることが告げられ、オーストラリア移住の予定だという。夫を喜ばせるためにカトリック教会で婚姻をし、子どもたちもカトリックとして育ててきたりリーだったが、コレットがプロテスタントと結婚して改宗したことに強く反発しているメアリーは、アンをカトリックにつなぎとめようと説得し、コレットに対しては今後、姉妹の縁を断つとまで宣言する。メアリーが炉辺で両親に介護される様子に耐えられなくなったコレットは不意にいなくなり、アンとビリーが慌てて後を追う。マーサはプロテスタントを罵り、シューイは火掻き棒をつつきながら口笛を吹く（2場）。

ラジオから流れる歌謡番組が終り、カトリック居住区にプロテスタントの暴徒が侵入し放火や銃撃の暴逆を行ったと、夕方4時半のニュースが報じる。驚愕したりリーは急須の紅茶をこぼし、シューイも凍りつくが、火掻き棒で猛然とラジオを壊そうと

する。謝るリリーを拒絶して、シューイは恐怖でおののくマーサを連れて退室。長い「間」。ピアノの旋律。泣きながら帰宅したメアリーに事情を訊くと、バスを降りたときに何者かに蹴られた、と言う。降りてきたシューイはメアリーを階上へ誘導。リリーだけが取り残され、「父が着けし肩章」の歌声と太鼓の音、アーチ作りの作業音が響く。リリーは火掻き棒を用意するが、突然、太鼓の音が止む(3場)。

1幕3場のように英国旗満載のアーチが建てられた戸外をリリーが見やり、マーサは椅子で半睡状態。装甲車の接近音と停止音がして、午後7時から午前7時迄の外出禁止を伝える陸軍士官の声が拡声器から流れる。シューイがマーサを連れて行き、やがてピアノの旋律。その間はずっとリリーは手で両耳を塞ぐ。メアリーが買い物から帰宅。窓の外に、今夜帰省予定の息子サミーの姿を発見するが、あいにく夜間パトロールの2人の巡回兵の接近にも気づいて、彼らに声をかけ自宅でのお茶に誘う。リリーの好意を無にせぬ配慮から、軍曹はシロップ付きソーダ・ブレッドやポテト・ブレッドなどのもてなしにも預かり、部下の一等兵(lance corporal)に無理強いして食べさせる。リリーは写真を見せたり、聖書を朗読して息子に警戒信号を送る傍ら、兵士たちを油断させる。二人が立ち去ると壊れていた勝手口のドアからサミーが無事に帰宅。久し振りの母子の感動的な対面。妹たちの結婚式や婚約式の欠礼を詫び、むかし父親シューイが話していた、赤旗掲揚がよき解決策という意見は実際に正しい、と伝えたいと言う。サミーはシューイ、メアリー、マーサと感慨深い再会を果たす。とりわけマーサは、子ども時代の「戦争捕虜ごっこ」などの思い出話を、いつになく饒舌に喋る。しかし、リリーが口をはさんだことから空気が変わり、メアリーはマーサの饒舌を叱りつけ、彼女は泣き出す。いまやメアリーがこの一家を支えており、サミーに干渉はさせない、もう二度と敷居は跨ぐな、とシューイはサミーに言い放つ。このやりとりを立ち聞きしていたリリーは、「国を変えるより神を変えるほうが簡単」と言い、人間の心は理性を受け入れるから辛抱強く対話を重ねることが大事だと諄々と説く。それを受けて、サミーは再度、父とメアリーとの話し合いに臨むが、やはり物別れに終わる。シューイは、自分はウルフ・トーンというプロテスタントを信奉する革命家であって、頑迷固陋な人間ではない、と主張するが、過去の英雄の話をいくら掘り起こしてもなんの解決にもならない、とリリーは反論する。カトリック居住区のフォールズ街への引っ越しを提案するメアリーに、フォールズ街など撤去して新飛行場でも建設すればいい、と罵り、最後の話し合いも決裂する。階上から流れてくるピアノの旋律は突如として乱暴になり、ハンマーで鍵盤を叩き割る音。マーサが「私の音楽が！」と嗚咽する。メアリーは、これで我が家に本物の墓場の沈黙が来るわ、と冷淡に言ってマーサを連れて戻る。なおも破壊音は続き、外出禁止令解除のサイレンと

ともに夜が白む。サミーは祈りの言葉を唱えて、別れでなく「ハロー」だと言って実家を立ち去る。リリーは椅子に崩れ、賛美歌「年月の巖」(Rock of Ages) を次第に大きな声で歌う(4場)。

## (2) *Bloom of the Diamond Stone* 『ダイヤモンドの輝き』(2幕全13場)

「紛争」を題材とするこの芝居を書くことになった直接の動機として、『タイムズ』紙に掲載された1枚の写真をヘアは挙げています。1972年4月3日付のその記事の写真とは、前日行われたベルファーストのミルトاون墓地までの行進で旗を掲げ持つIRAの女性メンバーが撮影されており、キャプションによれば(テキスト表紙にとられた写真では分かりにくいのだが)母親と一緒に旗を支え持っているらしい。1972年といえば、デリーで「血の日曜日」事件として知られる重大事件が1月30日に起き、2月2日にはダブリンの英国大使館が焼討ちにあい、2月22日にはイングランド南部の英軍訓練基地を擁するオールダショット(Aldershot)の兵舎爆破で7人が死亡するなど、その後も爆弾テロが発生。事態を重く見た英国政府は北アイルランドに臨時条項法(Temporary Provisions Act)を3月30日に発効させ、この時期には北アイルランドは直接統治下に置かれている。『タイムズ』掲載の4月2日のIRA行進の中身は不詳だが、緊張が極めて高まっていた時期であることは明らかである。

難解な標題の意味は、「押し黙って打ち解けない彼女の態度から、〈石〉とも仇名され」(13, 1幕1場のト書き)、「私は…ダイヤモンド地区出身の…「石」だった。(荒々しい口調で)私は…生まれ変わる。私は…花開いたところ」(I...was the 'stone'... from the Diamond district. (*Fiercely.*) I... am born again. I... have bloomed.) [49-50, 2幕3場のロザリーンの台詞]が端的に示すように、「ダイヤモンド」はベルファーストのカトリック系住民の居住地区<sup>2)</sup>の固有名詞であり、「石」は他者との交流を拒絶し、自己の殻に物言わず閉じこもる姿を周囲の者が悪口で〈石(木石漢)〉と呼んだことに由来する。つまり、「ダイヤモンド石」とはロザリーン自身を指し、19歳の彼女が4年の沈黙を破って美しく開花し、色香に輝いている様子を表現したものである。彼女はまた〈鍵なし金庫〉とも呼ばれているが、高貴な宝物を内に秘めながら、それを見せる手段のない切なさうまく表現されている。

本編に先立って、短い無言劇(mummer plays)2編——「見えない黎明」('Blind Dawn')と「ビリーの自転車乗り」('Billy's Bike Ride')が舞台上で、もしくは劇場ロビーか劇場前の通りにおいて、本編の役者によって演じられるのだが、紙幅の都合で省略する。

**第1幕。**ベルファーストの電子部品組立工場。黒髪の19歳の娘ロザリーン(Rosaleen



McGurk) が作業台で鋸締め作業中、誤って指を怪我して出血する。ハンダ室を抜けて出してラジオ音楽に合わせて踊っていた同い年の同僚ヌアラ (Nuala Quigley) がそれに気づくが、作業監視員のヘレン (Helen Shaw) という30歳の女性は、傷は大したことはなく応急処置で十分と判断する。ともにカトリックのロザリーンとヌアラにちょっかいを出すのは、プロテスタントのジム (Jim Sloane) という19歳の青年で、手押し車による部品移動が担当である。昼休みには、近くからパン屑を投げたり、両親や足指骨折の話、新曲のかかるディスコの話で彼女たちの気を引こうとする。遠くで爆発音がし、ヘレンは市内中心部勤務の家族の身を案じる。(ヘレンには兵士の恋人がいて彼の身の安全のために秘密にしている。) 午後の作業が再開される (1場)。

カトリックのスラム地区のマティルダ家。40代半ばのマティルダ (Matilda) がごろ寝のところに、30代のセイディ (Sadie) が飛び込み、アルバート街で銃撃戦と伝える。ごみ箱の蓋を打ち鳴らす音と口笛で英軍による手入れの警告を発し、装甲車のサイレンが響く。IRA兵士の逃走経路確保のため通例、戸には門をかけない。2発の銃声がして、セイディの16歳の息子リーアム (Liam) が家の中を走り抜けていく。戸が押し開けられ、照準機つきライフル銃を手にした20代の兵士が登場するが、容疑者不在で出ていく。戻ってきたリーアムの頭をマティルダは叩き、擦りむけ膝にヨーチンを塗ったり料金16ペンスの回転木馬に乗せたりした子どもの頃を思い出させる。付近の警備の様子を確かめてリーアムを帰宅させる。ロザリーンが帰宅。彼女は紛争恐怖が原因で、4年前から言葉が喋れなくなっている。マティルダは絶望から夫ショーン (Sean) の遺影を床に投げる (2場)。

カトリックの酒場、その名も『搜索家屋』。リーアムがバイトでバーテンをし、ヌアラは踊っている。40代の客の通称バック・レップ (The Buck Lep) は、ビールの注ぎ方が悪いとリーアムの腕を振じ上げるが、近々実働部隊訓練を受けるリーアムはカウンターに隠した銃を彼に向ける。ヌアラが穏やかにその銃を元に戻す。バック・レップは、レース犬が紛争で過敏になっているという新聞記事を見て、それなら精神安定剤を投与して、獲物のウサギは担架で運び、犬には車椅子に乗ってもらおうか、と冗談を飛ばしたり、結婚を反対された息子がフライパンで母親を殴り殺したが、聴覚障害の父親は気がつかず、へこんだフライパンでいつものように料理をしたという三面記事を紹介する。リーアムもポケットの紙片を見ながら政治的な替え歌を歌ったり、自分たちはプロテスタントに追われる「モヒカン族の最後」みたいなもので、アイルランド政府も対応に苦慮する厄介者だ、と調子に乗って喋る。頼んだビールが遅いとバック・レップはまた襟首をつかんでリーアムを床に倒す。ヌアラは気分転換に「テネシー・ワルツ」をかけて彼と踊り、バック・レップはロザリーンと踊る。セイディ

が駆け込んできて、有力IRAメンバーの逮捕と、大隊本部からのリーアムへの徴集命令を伝える。リーアムは銃を腰に、駆け出す（3場）。

早朝の工場。ジムがロザリーンに近づき、昨日の爆弾事件で死亡した2人のプロテスタント犠牲者のために2分間の黙禱が予定されている、と連絡する。この行事が職務代表委員（shop steward）の会合で勝手に決定されたことを憤るヌアラは、黙禱時にカトリックの〈天使祝詞〉を唱えると言うと、どうぞご自由に悪魔との交信を、とヘレンは侮辱する。ロザリーンを冒瀆発言の証人にして当局に訴える、と反発するヌアラに、口のきけない〈石〉のような彼女は証人になれないと一蹴され、ヌアラはハンマーをつかんでヘレンに歩み寄る。折よくジムが現れ、ヘレンは逃げ出す。しばらくして戻ってきて黙禱の指示を与え、自分の父親はもちろんプロテスタントだったが、国王ジョージ6世崩御の黙禱に際して「かあさん熊にとうさん熊、桃色お尻の赤ちゃん熊がおりました」と不敬にも唱える社会主義者だった、とヘレンは語る。昼休み、ヌアラはロザリーンに話しかけるが、もちろん返事がないので退屈して離れる。ヘレンは黙禱式の手配をジムに命じ、彼はロザリーンに手伝わせてアルスター旗を壁に釘で打つが、へまをして親指を叩き、彼女に八つ当たり。カトリック娘に旗を触らせたのをヘレンは咎め、みずから旗に釘打ちする。就業開始と同時にヘレンは起立を命じ黙禱が始まる。じきにロザリーンがふらふらと床に気絶するが、ヘレンとジムはそれを無視して黙禱を時間まで続ける。水を飲ませたりしてロザリーンは気を取り戻すが、ヌアラとともに退出。連中はクビにすべき、と鼻息の荒いジムをヘレンが無視するので、彼は当惑する（4場）。

日曜午後のミルタウン墓地。ショーンの墓参りにマティルダとロザリーン母子。墓石には「C中隊大尉 1957年7月4日戦死」の碑文。一連のしめやかな儀式を終えて、マティルダは死んだ夫に語りかける。近くの墓地の会葬者たちの声が切れ切れに風に運ばれる。どうやら17歳のIRA兵士の葬儀らしく、上空には偵察ヘリが舞っている。マティルダは故人のくれた結婚指輪をはずして墓石に置き、立ち去る。ロザリーンは膝まずいて墓石に耳を押し当てている（5場）。

早朝のマティルダ家。ロザリーンを迎えにヌアラが訪ねてきて、昨夜は212発の銃声を聞いたと言う。バック・レップも商売道具の水準器を凶器と間違えられて没収されぬかと恐れて立ち寄る。リーアムの姿を見かけないと心配するロザリーンに、ちょうど登場した母親のセイディが、徹底的な家宅捜索を受けたが息子は叔母の家に預けたから大丈夫、と伝える。自動小銃の発射音、ごみ箱の蓋の乱打音。例の兵士がやってきて、人定尋問をし、バック・レップも本名ハリー・スミスを名乗る。しかし昨夜の外出行動が不審だとして特別権限法第6条5項により逮捕・連行されてしまう。夫が

殉死した妻は組織をあげて庇護されることから、身の危険の少ないマティルダへの嫉妬に近い反感をセイディは露骨に示す(6場)。

昼休み前の工場。ジムがヌアラたちをディスコ・デートに誘っていると急にヘレンに呼び出される。この工場に爆弾が仕掛けられているという情報があり、全員避難する。爆弾処理の兵士が到着。慎重に不審物の撤去にあたっていると、偽情報であり警戒解除の無線連絡を受ける。兵士は職場に戻ってきたヌアラたちに話しかけるが、バック・レップを連行した同じ兵士だったので彼女たちは警戒して相手にしない(7場)。

**第2幕。**午前2時のマティルダ家。銃声やヘリの騒音が過ぎたあと、戦闘服姿のリーアムが銃を手に台所から押し入る。彼は瀕死の重傷を負っており、銃をロザリーンに預け、「死ぬのには訓練はいらない」と悶絶する。ロザリーンは呻き声をあげ、この芝居で初めて「司祭を…呼んで…くるわ」と断片的ながら言葉を発する。もはや司祭到着まで間に合わないと悟ったリーアムは、ロザリーンを相手に最後の痛悔の懺悔を唱え、ことされる。起き出したマティルダはリーアムの無残な姿に驚くが、ロザリーンの4年ぶりの発声を耳にしてさらに驚愕する。遺体を隠すことをロザリーンは提案、マティルダは支援を求めてバック・レップを呼びに行く。駆けつけた彼は自分は輸送担当ではない、と躊躇するが、家宅搜索の危険があるので承諾する。リーアムのポケットには出納帳の日記メモがあり、ロザリーンは「1月23日、正規志願兵に任命された。誇らしい気持ちで一杯だったので、誓いの言葉を復唱しそこないそうになった」をたどたどしく読み上げる。2月14日の記述には、工場帰りの、ある娘(おそらくはロザリーン)への思慕が綴られていた。日記に夢中になる二人をバック・レップは急かして、遺体を毛布にくるみ、3人で戸外に運び出す(1場)。

工場のラジオがテロ事件のニュースを報道する。例によってカトリックの悪口を並べるジムに、「むりに死なせている、しかも喜んで死なせているのはあなたたち。もう、からかいはい我慢しない」とロザリーンが喋り出すので、ジムは仰天して逃げ出す。ヘレンもこの事実を確認に訪れ、これまでは沈黙だけだったロザリーンはプロテスタントへの怒りをはっきりと表明する。近くのペンキ工場で爆発音。自分が作ったのも、仕掛けたのでもないけれど、内心の奥深いところでは爆発を望んでいたことを実感し、暗然となるヌアラとロザリーン(2場)。

カトリック酒場『搜索家屋』。「天使祝詞」朗読のうちに、リーアムの死亡を追悼する新聞記事6編がスクリーンに投影される。こんな死はこれで最後にしてほしい、と訴え平和を願うマティルダ、現実的に平和の維持が無理のなら戦争を最小限に押さえよう、とバック・レップ。ひとりリーアムの母親セイディは、弱腰の追悼挨拶を憤

慥をこめて非難し、これからも闘いを続ける、と好戦的で激越な演説を行う。IRAの礼式に則って厳かに出棺が行われる（3場）。

マティルダ家。リーアム殺害の報復行動のためだろうか、IRAによって家を徴用されたバック・レップが疎開にやってくる。またしても例の兵士が搜索に訪れ、ロザリーンは反抗的な姿勢をとり、とりなそうとしてバック・レップが兵士に手渡したタバコを彼女ははたき落とし、踏みにじる。兵士は帰るが、ヌアラが旅支度で訪ねてくる。工場勤務は辞めて叔母さんが住むという英国・北西部のポールトンに移住するのだと言う。別離を惜しんで涙を流すロザリーン（4場）。

工場。卑猥な歌を歌ってわざとロザリーンをからかっていたジムだが、親友ヌアラを失ったロザリーンの心を配慮するうちに二人は次第に打ち解け合い、握手してキスマでしかかる。そこへ落胆した表情のヘレンがやってくる。彼女の恋人の兵士はIRA狙撃兵によって射殺されたのだった。カトリックであるロザリーンへの憎悪をむき出しにするヘレン。プロテスタントの従業員たちが付和雷同してハンマーを打ち鳴らし、愛国歌を歌って騒然とした雰囲気になる。ジムは彼女の肩を持つのは危険と判断して立ち去る。悠然と作業を続ける彼女にレンガのかけらが投げつけられる。やがてジムとヘレンが戻ってきて、ジムは、ロザリーンに工場からの退去命令（退職勧告）を読み上げる。誰かが投げた物がロザリーンに命中し、倒れた彼女をジムは助け起こして連れ出す。ヘレンは彼女の作業机にアルスター旗を広げる（5場）。

午後3時のマティルダ家。マティルダが娘とジムの頭や顔の血を拭いて介抱している。ジムはちょうど来たバスにロザリーンと飛び乗ってしまい、呆然としたままカトリック居住区まで同行する羽目になったという。戸にノックがあり、マティルダは慌ててジムを裏部屋に隠す。来訪したのは、余所者の闖入を早くも嗅ぎつけたセイディで、しつこく探りを入れて獲物を捕らえようとする。マティルダは今度もバック・レップの応援を求め、司祭に変装するのはIRAの十八番だから、と女装させてこの地区をバスで脱出させる計画を立てる。髭を剃り化粧を施し、ドレスにカーディガンの服装、〈メアリー・オニール〉なる偽名まで打ち合わせて、脱出機会を窺う。二人きりになった僅かの時間に、これからどんな人生を歩むにしても、絶対に忘れない、とお互いに誓ってキスを交わす。マティルダとバック・レップが脱出の援助に出発し、逃走は成功に思われたころ、どういうわけか既に女装計画を察知していたセイディが訪れ、スパイ隠匿・逃走帮助だと報告に走る。組織の男が戸を斧で打ち破る音が響くなか、ロザリーンは「愛しい人」と繰り返し、呟く（6場）。

### 使用テキスト

Wilson John Haire, *Within Two Shadows* (London: Davis-Poynter, 1973)

Wilson John Haire, *Bloom of the Diamond Stone* (London: Pluto Press, 1979)

### 注

- 1) Wilson John Haire, *Bloom of the Diamond Stone* (London: Pluto Press, 1979), p.iv. および [http://www/4-wall.com/authors/authors\\_h/haire\\_wilson.htm](http://www/4-wall.com/authors/authors_h/haire_wilson.htm)
- 2) 皮肉なのは、'Diamond District' と言えば、文字通りにダイヤモンドなどの宝石店が並ぶニューヨークのマンハッタン西47丁目を連想することが多く、スラム街に付けられた呼称としては不似合いの印象を与えるであろう。ちょうどハワイ、オアフ島の方解石 (calcite) からなる火山がダイヤモンド・ヘッドと誤解されたように。

### 付 記

『二つの影のなかで』のシューイの台詞において 'human' が 'quman' と活字化されている例が頻出する (p. 2, 17, 24, 51)。一貫してこの形で現れるので単なる誤植とは思えないのだが、ベルファースト英語の訛のひとつなのだろうか。